昭和34年三重県鉱工業生産動態統計調査年報

鉱 工 業 生 産 概 況

一 般 総 合

昭和34年の本県下の鉱工業生産活動は，伊勢湾台風による未曾有の大被害を蒙つたにもかかわらず極めて活発であつた．すなわち鉱工業生産指数は年平均145.8（30年＝100）であつて前年に比して19.4％ というきわめて大きな増加を示したということである．この19.4％という増加は，戦後の復興の過程を一応終了したと思われる現在において驚異的なものであり，神武景気といわれた昭和32年の31年に対する鉱工業生産の増加率11.5％ を超えるものであつた．これを年間を通じてみると上半期は順調な上昇を続けたが，8月には季節的な関係で稍々低下し，10月には9月の伊勢湾台風の影響によつて 135.4％と一時的に生産の減少を来したが，その回復は意外に早く，12月には178.3となり台風前の記録を更新し，一般経済界の好況と相俟つて本県鉱工業は平穏且上昇を画きつつ，回復の過程から上昇の過程えと推移した．

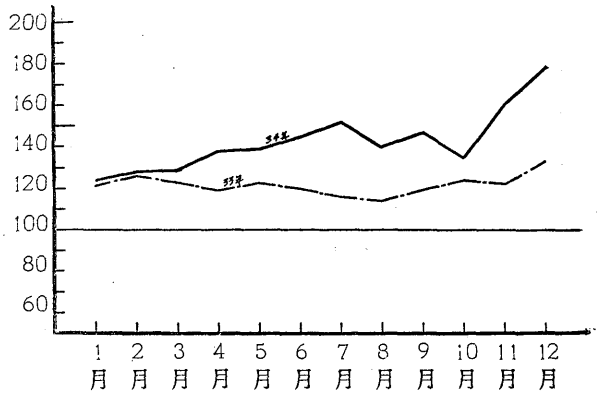
（第一表）

	三重県		全国	
	昭和33年	昭和34年	昭和33年	昭和34年
生産指数	122.1	145.8	144.8	179.5
対前年比	(−) 12.5	(+) 19.4	(+) 0.2	(+)24.0

（第二表）

	鉱工業総合指数	鉱業指数	製造工業指数
34年 上半期	134.2	116.7	137.2
下半期	152.7	117.1	155.7
年平均	145.8	116.9	146.6
対前年比 %	(+) 19.4	(+) 8.0	(+) 19.8

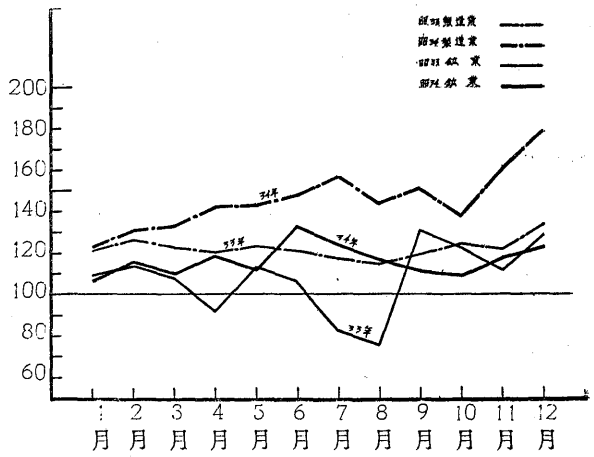
鉱工業生産指数 （綜合）（昭和30年＝100）



鉱 産 物

当部門の昭和34年の生産指数は116.9で前年比8％増であつた．業種別にみると非金属鉱業 38.7金属鉱業110.5石炭（亜炭）鉱業75.8で前年に比してそれぞれ31.0％，2.1％と何れも増であつたが，石炭（亜炭）は産業界が本年に入つてきわめて好景気の中にあるのに反し42.4％の減少となつた．これは需給改善のための出炭の抑制策等によるものと思われるが，これも年末には他の事情と相俟つて回復の兆がみえはじめた．

鉱工業生産指数 （昭和30年＝100）



（第三表）

	金属鉱業		非金属鉱業		石炭（亜炭）鉱業	
	昭和33年	昭和34年	昭和33年	昭和34年	昭和33年	昭和34年
生産指数	108.2	110.5	105.9	138.7	131.7	75.8
対前年比%	(+) 0.6	(+) 2.1	(−) 9.1	(+) 31.0	(+) 8.1	(−) 42.4

繊 維 工 業

昭和33年は操短に明け操短に暮れて，不況の代表といわれた繊維工業も34年には，次第に立直りはじめ，伊勢湾台風という大きな被害を被つたにもかかわらず，生産指数は年平均109.1を示して，前年対比14.4%の上昇を示した．

これを上期，下期に分けて33年のそれと対比すると上期9.2%，下期19.5%と漸増の線を辿つている．これは多くの他業種が操短を解除したにもかかわらず，34年に入つてもなお組織的に継続し，その間景気回復による市況堅調により立直りを早めた．このために価格も秋には急速に上昇し，操短も一段と緩和され年末には 125.8と年初に比して36.3%の伸びを示した．

（第四表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上 半 期	94.5	103.2	(+) 9.2
下 半 期	96.3	115.1	(+)19.5
年 平 均	95.4	109.1	(+)14.4

(イ) 綿　糸

昭和34年の平均生産水準は 105.8で景気の回復，操短緩和等の材料に支えられ前年対比17.8%の増となつた．これを4半期別にみると 1.4半期 96.7，2.4半期 105.0，3.4半期113.2，4.4半期108.2と3.4半期までは順調な伸びを示したが，9月の伊勢湾台風により10月は94.8と可なりの減産となつたが，市況の堅調によりその回復も意外に早く12月には120.4と9月の129.7に次ぐ増産となつた．

(ロ) 綿 織 物

昭和34年の平均生産水準は81.4%で前年よりの操短，生産制限等に加えて9月の伊勢湾台風の被害も当部門には相当大きく，特に大企業にそのウエイトが大きかつたためその後制限緩和策が講じられたとはいえ，前年のベースまでには回復できず遂に前年比5.6%の減となつた．

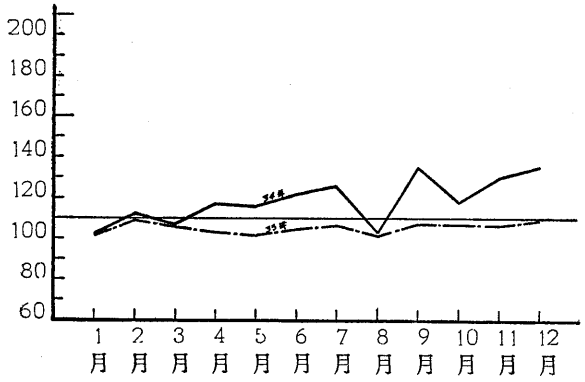
（第五表）

	綿糸		綿織物	
	昭和33年	昭和34年	昭和33年	昭和34年
上 半 期	79.9	100.9	89.8	87.6
下 半 期	99.7	110.7	82.6	75.2
年 平 均	89.8	105.8	86.2	81.4

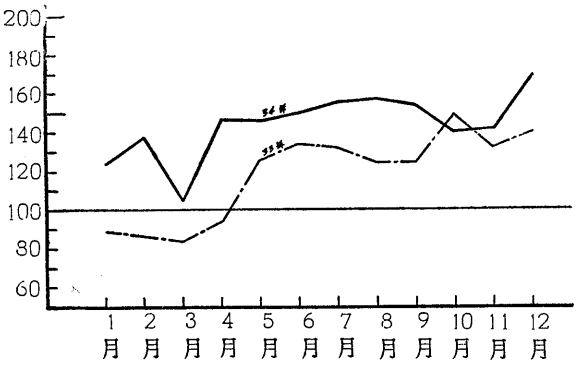
(ハ) 毛　糸

昭和34年の平均生産水準は 124.4で前年対比23.2%の増となつた．当部門は昨年後半より，稍々回復の兆しを現わしていたが本年に入つてからは月を追つて増産し，特に後半

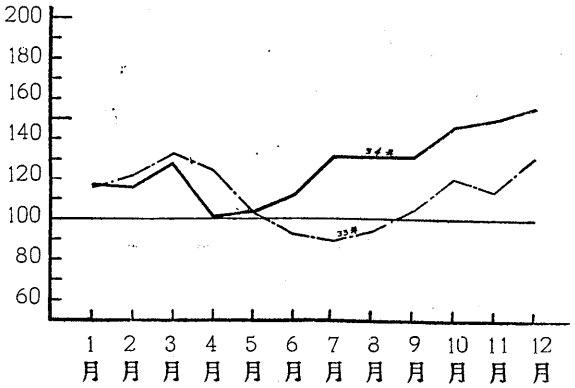
鉱工業生産指数　（繊維）（昭和30＝年100）



鉱工業生産指数　（ゴム工業）（昭和30年＝100）



鉱工業生産指数　（窯業および土石製品）
（昭和30年＝100）



に到つては季節的事情を除いては生産制限の緩和等によつて急速に上昇し，年初と年末の対比は51.4%の増となつた．

（第六表）

	昭和33年	昭和34年	対前年比%
上半期	99.1	111.0	(+) 12.0
下半期	103.0	136.1	(+) 32.1
年平均	101.0	124.4	(+) 23.2

㈡ 毛織物

昭和34年の生産平均水準は107.5で，9月所謂伊勢湾台風までの月平均は105.4であつたが，10月には台風の影響によつて104.4と減少したが，この台風を契機として実施された操短の解除と市況の堅調とによつてその後回復に向い年平均としては昭和33年の102.0に比し5.4%の増となつた．

（第七表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	105.3	106.9	(+) 1.5
下半期	98.7	108.1	(+) 9.5
年平均	102.0	107.5	(+) 5.4

㈢ 漁網

昭和34年の生産平均水準は96.6と．伊勢湾台風の被害の最も大きいものの一つで，10月には28.2と激減したが，その後の回復も順調で12月には111.2となり，前年の生産水準年平均90.8に対比すると未曽有の大被害にもかかわらず6.4%の増となつた．

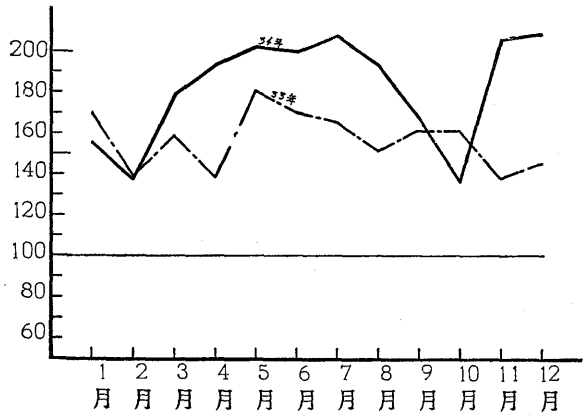
（第八表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	109.2	112.6	(+) 3.1
下半期	72.5	80.6	(+) 11.2
年平均	90.8	96.6	(+) 6.4

ゴム製品製造業

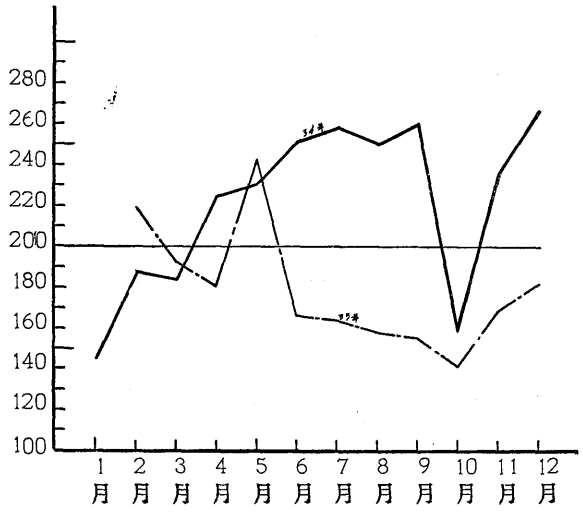
昭和34年の当部門は前年後半からの立直り傾向をそのまま引継ぎ，3月と伊勢湾台風の影響のあつた10，11月を除き逐月増加を示し，生産水準年平均144.4で対前年比22.0%と大巾な増加となつた．このような増加は自動車等関連需要産業の好調と，消費財の両面の需要が盛んであつたことが大きな原因である．

鉱工業生産指数（化学）（昭和30年＝100）



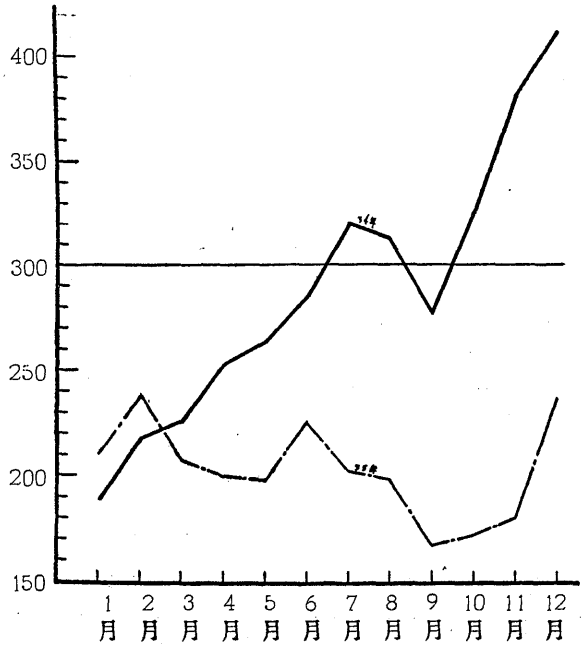
鉱工業生産指数　（一般機械器具）

（昭和30年＝100）



鉱業工生産指数　（電気機械器具）

（昭和30年＝100）



（第九表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	103.0	135.5	(+) 31.6
下半期	133.9	153.2	(+) 14.4
年平均	118.4	144.4	(+) 22.0

窯業および土石製品製造業

昭和34年当部門の平均生産水準は127.0で前年の112.4に比し13.0%の増となつた．これを年間を通じてみると．第1.4半期は 120.4と前年4.4半期の122.0に対し1.3%の微減となり，更に第2.4半期においては一部業種の減産に伴い113.0となつたが，その後は市況の堅調と輸出の好調に支えられて第3.4半期には131.6第4.4半期には141.0と期を追つて上昇し，年末には155.2と大巾な増加となつた．

（第十表） 陶磁器生産指数

1月	109.7	4月	135.9	7月	144.0	10月	115.4
2月	119.1	5月	138.6	8月	148.1	11月	137.9
3月	139.8	6月	148.7	9月	147.2	12月	151.2

	第1.4半期	第2.4半期	第3.4半期	第4.4半期	年平均
昭和33年	127.4	129.3	141.7	145.3	135.9
昭和34年	122.9	141.1	146.4	134.8	136.3
前年対比%	(−)3.5	(+)9.1	(+)3.3	(−)7.2	(+)0.3

化学工業

昭和34年平均生産水準は 183.1で化学工業の関連需要産業の活況等により前年の 156.9に比し16.7%の増加であつた．これを年間推移についてみると，1,2月は季節的原因よつてやや低下し平均 147.6となり10月には伊勢湾台風の影響により，更に137.7と低下したが，11月には早くも回復し206.5と上昇し12月には更に209.9と上昇して越年した．

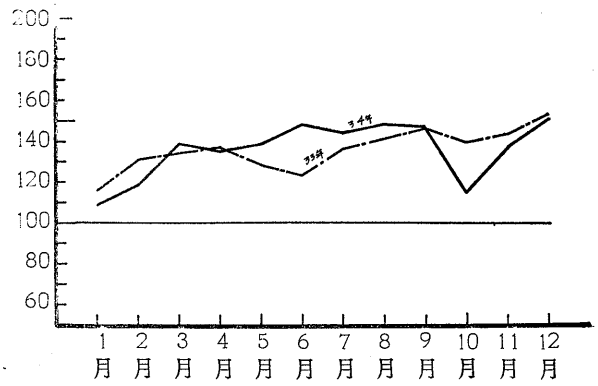
（第十一表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	160.0	178.7	(+)11.7
下半期	153.8	187.5	(+)21.9
年平均	156.9	183.1	(+)16.7

鉄鋼業

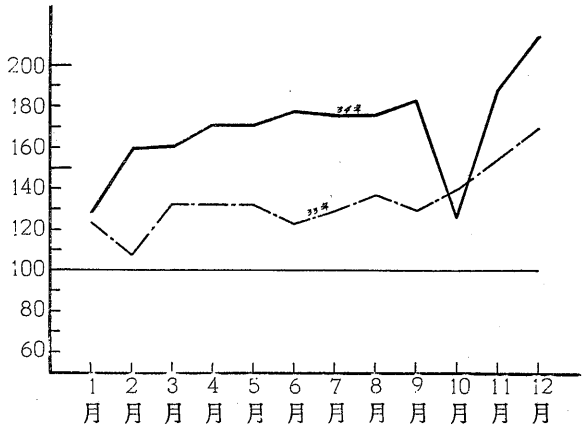
昭和34年の平均生産水準は 169.8で前年対比26.2%の増加を示した．33年は不況に見舞れて生産も前年対比で27年以来はじめて低下したのであるが，33年後半過ぎより立直りはじめ34年は伊勢湾台風の影響をうけた10月を除けば月を追つてほぼ増加を続け，12月には年初の1，2月に比し49.3%も上回るという躍進を示した．このような生産増は設備能力，原材料等にさして大きな問題がなかつたという供給側の要因と，市況の回復による需要の増大という需要側の要因とによるものと思われる．

鉱工業生産指数 （陶磁器）（昭和30年＝100）



鉱工業生産指数 （鉄鋼製品）

（昭和30年＝100）



これを年間推移についてみると，1月に127.8ではじまつたものが逐月増加して6月には178.5となつたが10月には伊勢湾台風によつて126.9と大巾に減少したが，11月には早くも189.9と9月の183.5を3.5%上回る急速な回復ぶりをみせ12月には214.6と基準時2倍を越える水準を示した．

（第十二表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	125.5	161.5	(+) 28.7
下半期	143.6	178.1	(+) 24.0
年平均	134.5	169.8	(+) 26.2

機械製造業

一般機械の昭和34年生産水準は222.0と33年の177.1に比し25.4%の大巾増加となつている．このように好調だつた原因は関連需要産業の活況と相俟つて33年に停滞していた設備投資の動向も顕著に回復し，さらに急激に増勢に向いつつあるなど需要要因が重なり合つてこの活況を呈したものとみられる．年間の足どりをみると年初は昨年末より低下したが2月よりは伊勢湾台風の影響をうけた10,11月を除いてはほぼ一直線の上昇を示している．これを上期，下期に分けてみると前年の同期に比してそれぞれ6.5%および47.7%の大巾増加となつている．

（十三表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	192.0	204.4	(+) 6.5
下半期	162.1	239.5	(+)47.7
年平均	177.1	222.0	(+)25.4

電気機械器具製造業

昭和34年の平均生産水準は 288.8で前年の 203.6に比し41.8%と大巾な増加を示した．これは消費水準の高度化，設備の合理化と相俟つて設備投資の急激な増勢等によつて需要がきわめて活発であつたためこの活況を呈したものとみられる．これを上期，下期に分けてみると，前年の同期に比してそれぞれ16.6%および75.3%の大巾な増加となつている．

（第十四表）

	昭和33年	昭和34年	前年対比%
上半期	213.9	239.5	(+)16.6
下半期	192.9	338.1	(+)75.3
年平均	203.6	288.8	(+)41.8